

## 四万十の森と川と、そして海と、共に生きる者たちと。

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は、“クジラに会える町”黒潮町から、NPO砂浜美術館館長：ニタリクジラと、四万十川がつなぐ生き物たちの『共生』について考えてみたいと思います。



### クジラが泳ぐ海

クジラはその昔から、土佐の人々にとってはカツオと並んでとても身近な存在であったようだ。

土佐の民謡『よさこい節』の中で謡われるこの歌、♪言うたちいかんちゃ おらんくの池にや 潮吹く魚が泳ぎよる よさこいよさこい♪ 解説するまでもなく、池は土佐湾で、潮吹く魚とは鯨のことである。

黒潮が近海を流れる土佐湾は日本有数のクジラの生息域で、かつては陸上からもクジラやイルカの姿を確認できたのだという。

それ故、過去には捕鯨文化も栄えていたのだが、近年では、大海原にクジラやイルカの姿を見る『ホエールウォッチング』が、土佐湾沿いの多くの市町村で盛んに行われている。

そのホエールウォッチング、始まったのは 1950 年代半ばのアメリカ西海岸でのことで、日本においては、1988 年に、全国に先駆け小笠原で始まり、その後各地に広がっていったようだ。

そして高知県では、“日本上陸”の翌年 1989 年に、四万十市のお隣、四万十川河口域に程近い黒潮町(旧大方町)で“高知県初”のホエールウォッチングが 8 隻の漁船でスタートした。

その黒潮町『大方遊漁船主会』事務局を務める『NPO砂浜美術館』を今回訪問し、土佐湾に棲む『ニタリクジラ』について、ホエールウォッチング事業部の宍戸希実さんにお話を伺った。

### 砂浜が美術館 「NPO砂浜美術館」

四万十川の河口域、下田。遠浅の海岸線がずっと続くこのあたりには、年中サーファー達で賑わう有名なサーフポイントが多い。

その下田から約 10km 北上する。四万十市から黒潮町に入ってしばらく行けば、4km にわたる美しい砂浜とそれに沿って続く松林が見えてくる。黒潮町入野の松原だ。

ここに、『私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。』という、建物のない美術館『砂浜美術館』がある。

『美しい砂浜を、頭の中で“美術館”にみたとすると、いろいろな作品が見えてくる』というコンセプトのこの美術館、沖に見える船やクジラ・イルカの群れ、砂浜に沿って広がる松林やラッキョウ畑、天井に広がる南国の青い空など、訪れる人達が自分たち自身で作品を見つけられる美術館なのだ。そしてこの砂浜美術館、特筆すべきは、館長を沖で泳ぐ『ニタリクジラ』が務めるということだ。

### ホエールウォッチング事業部

「先日、今年のホエールウォッチング期間が決まりましたが、4/27～10/末までの半年間で、今からすごく楽しみです。」

嬉しそうにそう話してくれるのは、この砂浜美術館でホエールウォッチングを担当する、岡山県出身の宍戸希実さんだ。

この仕事に就いて 3 年目が始まった。



砂浜美術館のジョーこと宍戸希実さん



クジラ・イルカ写真提供：  
NPO 法人 砂浜美術館

「2, 3 歳の頃、両親に連れられて行った水族館でイルカのショーを見て、その虜になりました。字も読めないうちからクジラ・イルカの図鑑を買ってもらい、細部まで覚えるくらいに繰り返し見ているような子供でした。将来はイルカのトレーナーになりたいと思って専門学校で勉強もしましたが、その頃から足繁く通って来ていた、ここ砂浜美術館の“クジラ担当”スタッフに、2年前に幸運にも採用していただいたのです。」

その宍戸さんの仕事は、夏場はホエールウォッチング受付業務がメインで、ガイドとして乗船したり、事前レクチャーをしたりと多忙を極めている。Off シーズンにも、修学旅行生勧誘などの営業活動、ホエールウォッチング欠航時のプログラム作成やボランティアガイド養成講座を開講したりと、年中忙しく働いている。「でも、仕事は本当に楽しい。幼い頃からの夢だったこの仕事に就けて、自分はとてもラッキーだったと思っています。」

### 土佐湾のニタリクジラ

ご存じのように、クジラは海に棲む哺乳類で、地球上にいる最大級の動物である。

クジラ類はその形態からハクジラとヒゲクジラに分かれていて、ハクジラの中で比較的小型の種類をイルカと呼ぶことが多く、現生するクジラ類は 80 種以上にのぼるようだ。

しかし、彼らの一生は水中で、海面に上がるのは呼吸の時ぐらいだ。だから、海に生息する野生動物であることや、各々の個体数が限られていることなどが理由になって、クジラの世界はまだまだ不明なことが多いと言われている。

土佐湾で見られるクジラは数種類あるのだが、大陸棚が広がり浅海である湾西部のここ黒潮町と、陸近くまで深い海溝が接近する湾東部の室戸岬沖では、観察できる種類には違いがあるようだ。

「日本で見られるのは、ミンククジラ・マッコウクジラ・ザトウクジラ・シャチなどですが、日本のホエールウォッチングでは、高知県だけが『ニタリクジラ』を対象としていて、ここ黒潮町で見られるのは、2 種のイルカ(マイルカ・ハナゴンドウ)と、そのニタリクジラです。」

クジラ目ヒゲクジラ亜目のニタリクジラは、暖海性クジラで、北緯 40 度～南緯 40 度の間、水温 20℃以上の海に広く分布する。体長は約 12～14m、体重は約 14t で、そのスラリとした優美な体付きとあまり警戒しない穏やかな性格から、別名『海の貴婦人』とも呼ばれている。(参照: 左写真・最下段写真)

その名前の由来だが、ニタリクジラは 1940 年代末に識別されるまでイワシクジラと同種と扱われていたので、“イワシクジラ”であり、ナガスクジラに似た背びれを持ち、それに似た噴気をあげるなどから“ニタリ(似たり)クジラ”と名前がついたのだという。決して“ニターツ”と笑っているからではないのだが、クジラはどれも笑っているように見えるので、大まじめにそう考える人も多いと聞く。(実は、私もその 1 人でした…)

「クジラはみんな同じに見えるという方もいますが、当然一頭一頭ちゃんと個性があります。その特徴をとらえ見分けていくことを『個体識別』と言うのですが、ここ黒潮町では、1994 年から毎年ニタリクジラの個体識別調査を行っています。調査の内容は、ニタリクジラの背びれの写真を撮ることで、背びれの形、切れ込み、体についた傷などを元に見分けていくのです。個体識別番号(TB…土佐湾 Tosa Bay と、ニタリクジラの英名 Bryde's whale の略)もついていますよ。」

その調査によって、黒潮町沖には 60 頭ほどのニタリクジラの生存が確認されている。

「観察しているといろいろなことがわかってきます。たとえば、ニタリクジラの子供は 4m ほどで生まれてくるのですが、クジラの中では親離れが遅いのです。ニタリ以外は半年位で独立しますが、土佐湾のそれは特に親離れが遅く、2 年経っても親と一緒にいることを確認しています。こんなことも、調査を続けているからわかってきたことです。」

「全般的にクジラ研究は進んでいるとはいえ、まだまだ未解明の事が多いのですが、それだからこそ、クジラやイルカに魅せられるということもあるのかもしれないです。私の仕事は“研究”と言えるほどのものでなく“観察”のレベルですが、その観察によって

いろいろわかってきたことも多いのです。だから、生涯においてずっと何らかの形でイルカやクジラに関わっていききたいですね。また、こんなに近くにいても、わざわざ会いにこちらから出向かなければ会えないというところも、魅せられている理由の一つですね。私は、ホエールウォッチングでクジラ達に遭遇する度に、『やっと会えた！』『私に会いに来てくれたのかも？』と思ったりするのですから。」

## 四万十の森と川と、そして海と、共に生きる者たちと。

ところで、多くのクジラは『回遊』する。

回遊とは、海や川に生息する動物が索餌や産卵のためや適水温を求めて移動することだが、高い遊泳能力を有する彼らの多くは一年間で外洋を数千～数万 km にわたり移動するという。しかし、ニタリクジラは大きな回遊をしないことがわかっている。

「特にこのニタリクジラは、回遊をほとんどせず土佐湾に“定住”していることが近年わかってきました。漁師さん達は、彼らを冬季にも幾度となく目撃していたようですが、ここ数年の冬季調査で、ニタリクジラが土佐湾に年中生息することが裏付けられました。しかも、大きな回遊はしないニタリクジラの中でも、土佐湾のものは特異な存在で、湾の中を、餌を求め狭い範囲を移動するだけのようです。つまり、それだけこの“棲み心地”が良いのでしょうね。」

また、ニタリクジラが主食とするイワシなどの小魚は、カツオなど大型回遊魚の餌でもあり、ニタリクジラのいる海域には、その大型回遊魚の群れがいる可能性が高いといわれている。そしてカツオにとっては、クジラにつくことで天敵カジキから身を守るというメリットもあり、ニタリクジラはカツオの群れの中に見出されることが多いらしい。その証拠に、このクジラがいるとカツオが良く捕れることから、高知県ではニタリクジラを“カツオクジラ”とも呼んでいたようだ。

このようにニタリクジラは、一個体でカツオの群れと共に小さな生態系を形作ると考えられている。

土佐湾のニタリクジラとカツオのつながりは、そのようなところにあったのだ。

それではなぜ、四万十川の河口域にこれほど多くのニタリクジラが居着いているのだろうか。

ご存じのように鯨類は、海洋生態系の高次捕食者で巨体故に大量の餌を必要とする。

それ故、その棲息環境は“豊かな餌場”が条件となるだろうことが、容易に想像できるのだ。

だから、クジラが居着くほどの“豊かな生態系”には、森・川・海の大きな自然体系が必要とされ、ニタリクジラの存在は、“四万十川流域が未だ本来の森・川・海の生態系を保っていることの証拠”と考えられているのだ。

四万十川流域に育つ様々な樹木からなる森は、栄養分豊かな土をつくり、ミミズや虫など様々な動物を育て、これらを食べる鳥たちの棲家となる。森に降った雨水はスポンジ状の土に蓄えられ、栄養分豊かな水を川に送る。川は森から送り出されたこの水で藻を育て、藻は虫や魚のエサとなる。栄養分豊かな川は海に注ぎ植物プランクトンを育て、植物プランクトンは動物プランクトンのエサとなり、動物プランクトンは小魚のエサとなり、そしてそれはニタリクジラのエサとなる。

クジラが泳ぐ豊穰なる海から上った水蒸気は、やがて雨となって、多様な命が育まれる源、四万十の森へと降り注ぐ。

全ては海に始まり、四万十の森に始まり、全ては循環している。

四万十の山々から太平洋を望む時、山と海をつないで流れるしなやかな曲線が、遠くそこには見えてくる。

この川は、多くの生き物たちをつないで、そして、この川に関わる多くの人々の心をもつなげてきた。

四万十川は、今までも、そしてこれからも、ゆったりとゆったりと、流れ続けていくのだろう。

(取材/記事: 矢野由美子)

